

一日の始まり

土師 猛

瞼を開けると、遮光カーテンを透った朝の籠陽があった。

腕を伸ばし、ラジオのスイッチを押すと、聴いたことのある心地良いシンフォニーが流れ出した。

いつものようにレースのカーテン越しに、窓を開ける。

裏山の森林公園から爽やかな風が、侵入してくる。

朝の光と空気が重なり合った部屋の中で、クラシックを楽しむ。

そろそろ起きなければと思いながらも、ベッドに貼りついてしまう。

軽い空腹を感じ、身支度を整え、クロスモールの喫茶店へ残暑の街路を向かう。

昨夜降った雨の水溜りが、あちこちと点在している。

[いらっしゃいませ]

[お早よう]

マガジンラックから朝日新聞を取り出し、空いているカウンター席に座る。

顔見知りのウエイトレスが、笑いながらやってくる。

[いつもの・・・・]

[そう。世界一おいしいコーヒーと、スクランブル発進を]と、使い慣れたジョークでモーニングサービスを注文する。

朝日新聞が募ったエッセイ[あなたがつづる。おやじのせなか]の優秀作品

〈酸っぱいおにぎり〉に、目が止まった。

父親と娘の照れくさい関係と題する講評を読んでいるうちに、父娘の似た者同士を書いたこの作品がどうしても入手したくなった。

事情を話し紙面を借りて、隣のイズミヤでコピーをとる。

[いよいよ、芸術の秋ですね]と、帰りにママに声をかけられ、戸惑ってしまった。

注、このエッセイは2007年9月に執筆したものに今回加筆しました。